ひとくち法話

宝林宝樹（ほうりんほうじゅ）（43）

猫というものは大体そういうものなのでしょうが、とある門徒さんの家の猫は、ちらりと顔を見せることもあれば、奥に引っ込んだまま最後まで姿をあらわさないこともあり、実に気ままなものです。ある日のこと、お勤めを終えて振り向くと、なんと私の後ろにちょこなんと座ってお仏壇をじっと見つめているではありませんか。聞けばお勤めの間中ずっとそこに座っていたとのこと。「おお、今日はキミも一緒にまいってくれたんだねえ」とうれしい気持ちにさせられました。「馬の耳に念仏」という諺がありますが、さてこの猫の耳にお念仏はどのように聞こえていたのでしょう。

しかし、たとえ誰の耳にであろうとも、お念仏の声が届くということは、そこにお念仏の声を発する誰かがいるということです。そこにはお念仏の声が確かにあるということです。自身においては、どんな場所でもどんな時にも「私の口にお念仏」とありたいものです。

その後猫とは、それぞれにご用意いただいたおやつを一緒に頂戴しました。またどうぞおまいりください。

真宗興正派